

## 公現後第5主日礼拝説教「よく聞き、よく見る」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年2月9日

### 【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 1章18～25節

<sup>18</sup>不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。<sup>19</sup>なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。<sup>20</sup>世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。<sup>21</sup>なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。<sup>22</sup>自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、<sup>23</sup>滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣やこのものなどに似せた像と取り替えたのです。

<sup>24</sup>そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。<sup>25</sup>神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拜んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。

### 【福音書日課】マタイによる福音書 13章10～17節

<sup>10</sup>弟子たちはイエスに近寄り、「なぜ、あの人たちにはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。<sup>11</sup>イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。<sup>12</sup>持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。<sup>13</sup>だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。<sup>14</sup>イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、  
見るには見るが、決して認めない。』

<sup>15</sup>この民の心は鈍り、  
耳は遠くなり、  
目は閉じてしまった。  
こうして、彼らは目で見ることなく、  
耳で聞くことなく、  
心で理解せず、悔い改めない。  
わたしは彼らをいやさない。』

<sup>16</sup>しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。<sup>17</sup>はっきり言っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞いたかったが、聞けなかったのである。』

## 天の国の秘密【こども説教のために】

宣教の旅を続けられた主イエスの周りには、いつも多くの人が集まって来ていました。主イエスの評判を聞いて、一度教えを聞いてみよう、自分や身内の者の病気を癒してもらえるかもしれないと、やって来る人たちがいたからです。その人たちを迎え入れるために、主イエスは、休む間もなくお働きになられたのです。

もちろん、主イエスは、集まって来る人と会うのを断ることもできたでしょう。学校の授業でも、病院の診察でも、受けようと思う人が自由に受けられるわけではありません。決まった時間に行くものです。主イエスも、やって来る人たちに、教えをなさる日時、病気を癒す日時を決めて、時間外にやって来る人を断ってもよかったです。けれども、主イエスは、そうはなさいませんでした。会いたいと思ってやって来る人は誰であっても、いつも迎え入れ、教えたり、癒したりしてくださったのです。それどころか、主イエスは、遠慮して近寄って来ない者には、ご自分から声を掛け、呼び寄せられることも、少なくなかったのです。

あるときは「群衆を呼び寄せ」(15:10)、あるときは「子供を呼び寄せ」(18:2)、あるときは「弟子たちを呼び寄せ」(10:1) られました。あの十二弟子たちも、初めは皆、主イエスが声をお掛けくださり、呼び寄せてくださったので、主イエスの近くにいることができるようになったのです。何度も呼び寄せていただいたおかげで、弟子たちは、自分から主イエスに**近寄って**いくことができるようになったのかもしれない。

主イエスに近寄っていくことができるように弟子たちは、きっと、いろいろなことを主イエスにお聞きしたことでしょう。皆で一緒にお聞きした教えで分からないことがあれば、近寄って質問してはお答えいただき、さらに深く教えていただく。それが、弟子たちと主イエスの日常の風景になっていたのかもしれない。

その弟子たちに、主イエスはあるとき、「あなたがたには**天の国の秘密**を悟ることが許されている」とおっしゃいました。「あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ」と。

わたしたちも皆、主イエスの名を聞いて、教会に集まって来ました。主イエスがお呼びくださって、わたしたちは、主イエスのもとに近寄らせていただいているのです。教会に集まるとき、わたしたちは、目に見えなくても、ここに主イエスがいらして、わたしたちをお招きくださっていると信じているのです。ここで主イエスの教えを聞き、癒しの御業を見て、もっと主イエスに近づきたいと願っているのです。ここで主イエスを見て、その御声を聞く者としていただくのです。ここに「**天の国の秘密**」があるからです。

## 「あなたがたは幸い」

コロナ禍の騒ぎが始まってから5年、教会の営みは、インターネットを介したことが増えるなど大きな変化もありましたが、従前どおりに戻ったことも少なくありません。この礼拝堂の会衆席も、昨年末のクリスマスの祝いから、ほぼ元どおりになりました。着席できる席を減らさず、すべての席にお座りいただけるように配置するようになったのです。クリスマスやイースターに100人の出席があっても、礼拝堂に着席できないようなことはなくなりました。ただし、この礼拝堂の広さにしては、会衆席の数が多いようで、すべての席に着席できるように配置すると、必然的にお座りになられたときに前後が狭く感じられるようになってしまっています。ですから、座席数は増えましたが、通常の出席者数はほとんど変わりありません。むしろ、寒さが厳しく、風邪などの流行るこの季節ですから、少な目になっているかもしれません。やはり、礼拝に際しても、互いの間に物理的な距離が保たれることは必要なのでしょう。場合によっては、配置する座席自体を減らした方が、おいでになる人の数は増える、ということもあるのです。

他人との間に保つべき空間を、「パーソナル・スペース」と言ったりします。一人ひとりの人格が大切にされるためには、この「パーソナル・スペース」を保つことも必要でしょう。もちろん、「パーソナル・スペース」は、人それぞれです。これが非常に小さく、誰とでもハグをするなど、他人との距離を近く取ることが平気な人もいるでしょう。他方で、これが侵されることによって不安を強くする方がいるならば、配慮が必要です。相手の「パーソナル・スペース」が広いのか狭いのかわからなければ、わたしたちは、必然的に広めに想定して、むやみに近づきすぎないようにするでしょう。「人との距離を広く保っておいた方が安全」と考えるのです。

感染症対策として「ソーシャル・ディスタンス」が喧伝されて以来、この互いの間に保つ「距離」は、ますます広く意識されるようになってきたかもしれません。コロナ禍前には日曜日ごとに教会に足を運び、礼拝堂で共に集った者たちと礼拝にあずかることが当たり前だったのに、今はオンライン礼拝で満足してしまっている、という方も少なくないのです。もちろん、オンラインでも礼拝につながってくださっていただきたいのです。外出が困難になられたときの頼みの綱にしていきたいのです。

それでも、なお申し上げますれば、オンライン礼拝は、実際に教会に集い、礼拝堂で共にあずかる礼拝と同じではありません。互いの間に、大きな隔ての壁があるからです。お互いに見ること、聞くこと、触れること、空間を共にして互いの息を交換すること。それは、礼拝堂で共に礼拝にあずかる者だけに与えられる祝福、幸いなのです。

## 「あの人たち」は？

繰り返しになりますが、わたしは、オンライン礼拝に加わってくださる方があることを喜んでいますが、それを否定するつもりは少しもありません。

わたし自身、時間に余裕のある時には、他の教会の録画されたオンライン礼拝を視聴することも少なくありません。教会の責任を負う牧師は、従来であれば他教会の礼拝を知る機会が非常に少なかったのです。それが、多くの教会がインターネット上に礼拝や集会を公開するようになって、いくらかでも触れることができるようになりました。説教集が出版されるような著名な牧師の説教だけでなく、わたしのような市井の名も知らぬ牧師の説教を聞く機会も、格段に増えました。名も知らぬ牧師の説教に感銘を受けることも少なくありません。けれども、いくらそのようなものを視聴しても、わたしは、その教会の人々のことを知らず、その牧師の名も知らぬままで、ただそこで語られ、祈られていた言葉を聞いただけなのです。映像があって、その姿を見ている、映像が終わった後のその人の姿は、少しも知らないのです。

オンライン礼拝は、ご覧くださっている方が好むと好まざるとにかかわらず、配信する側の都合で始められ、配信する側の都合で一方的に終了してしまうのです。逆に言えば、こちらからは、モニターの向うで見てくださっている方のことが、本当には見えていないし、何も聞こえていないのです。

主イエスは、評判を聞いて集まって来る多くの人々を前に、教えをお語りになられました。それは、しばしば「たとえ」を用いられた教えだったと言います。印象深い「たとえ話」は、聞く者の心に残り、多くのことを考えさせ、新しい洞察を与えるものになったに違いありません。そうであればこそ、わたしたちも、主イエスのたとえ話を、喜んで繰り返し聞き直すのです。聞き直すたびに、新しい発見があるからです。それは、主イエスも望んでくださっていたことでしょう。

けれども、主イエスは、ただ「たとえ話の上手な教師」でいらしたわけではありません。「たとえ話」をはじめとするご自分の教えが人々の心に残ればよい、と割り切られていたのではありません。その教えを聞く者を、ご自分の近くに呼び寄せられたのです。近くにいるようにお招きになられたのです。「あの人たち」と呼ばれるようなところに留まらせず、「あなたがた」と呼ばれるところにまで近寄る者となるように、声を掛け、近づいて来てくださったのです。互いに共にいて、その姿を見、その声を聞き、同じ空間で互いの息を交換し合う。そのような交わりの中に互いを見出すことの幸いを、実践してお見せくださったのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:20) と互いに語り合える交わりを弟子たちの間にお始めくださり、今、わたしたちをもお招きくださっているのです。